

〈祈りのために〉

「病に苦しむこの人を打ち砕こうと主は望まれ、彼は自らを償いの献げ物とした」。

イザヤ書 53 章 10 節

「いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ」と天使が讚美します。人間の腐敗が積み重なっているこの世界に、栄光が神にあると歌うのです。神ご自身の義が世界に満ちているために、地上に生きる私たちに「神の義を受け入れなさい。ここから平和が起こされる」と言われるのです。そのためにキリストがこの世界に来られました。私たちは神の義に生きないからです。イザヤは「病に苦しむこの人を打ち砕こうと主は望まれ、彼は自らを償いの献げ物とした」と預言しております。神がご自分の独子を遣わされたのは、キリストを打ち砕くことしにか私たちの救いがないからです。キリストは罪に対する神の怒りと裁きは真に正当なことだ、と承認されました。私たちは誰一人、神に罪の償いを真直ぐに差し出すことが出来ないために、キリストは私を砕くことは主の正しいみ旨である、私を悩ますのは正当であると認めて、償いの犠牲となられたのです。こうして驚くべきことに、私たちがキリストの十字架の犠牲を感謝の知識をもって受け入れることで、神の裁きを受けた者のようにして下さったのです。洗礼によって「キリストと共に葬られ、その死にあずかる者」（ローマ 6 章 4 節）とされるからです。これが私たちへの罪の赦しです。

このキリストが沖縄に立っておられます。差別され踏みにじられているこの場所に、神の義が輝いております。義なる神が、70年前の戦争によって日本の償うべき罪を、代わりに担って苦しんでいる沖縄の人々の傍らに、打ち砕かれて償いの献げ物としてのキリストを伴われたのです。世界各地で戦争が起こり、この国もその準備を始めようとしている昨今、それでも平和が保たれているのは、犠牲となって苦しんでいる者たちの叫びが、償いの役割を果たしているからです。私たちは、沖縄の人びとの叫びを毎日聞きます。その叫びは、再び戦争を起こしたくないという叫びです。この叫びが、世界にある争いと戦争の和解の礎となっているのです。この償いの献げ物を神から賜っているのです。これは驚くべき神からの贈り物です。未だ止むことのない人間の罪の腐敗のただ中で、神の栄光が介入していることを、私たちは、飼葉桶のキリストの誕生から見るのです。（降誕節説教 2015年12月20日から）

〈祈り〉 主よ、科学技術や医学では解決のできない不安、政治では解決のできない国際紛争と民族と民族との争い、人間の善意では解決の出来ない人と人との不和と争いが、絶え間なく続いております。世界が危機に陥ったとき、これまで教会の兄弟姉妹は繰り返し熱心に祈ってきました。人間の叡知でも民主主義でも解決のできない限界が、この世界に山積しております。今日ほど祈りの必要な時はありません。どうぞ、苦しみの中にある人々の叫びを自分の叫びとして、執成して下さるあなたに祈る者になってください。

川越弘（沖縄伝道所牧師 靖国神社問題特別委員会委員）

「ヤスクニ問題の視座と射程」その一考察 …キリスト告白の三位一体的展開を… (その1)

枝松博展 (久留米教会牧師)

日本キリスト教会 50 年史 (1951 年～2000 年) は、1969 年を一つの節目と劃している。この時を境に日本キリスト教会の福音宣教と教会形成が、それ以前と区分されるとの自己理解である。その事柄とは、靖国神社問題である。戦前の反省に立っての「靖国神社国家護持法案」への反対の表明と行動は、時の自民党政府への批判に留まるものではなく、主の教会の存立そのものに関わることとしての取り組みであった。そこには福音理解、宣教と伝道のあり方、説教、祈り、礼拝等、教会に関しての点検、さらに信仰者、キリスト者のあり方の吟味が伴っていたのである。50 年史は、それを「改革教会の信仰の確認」と言い表した。まずヤスクニ問題の基軸(視座)がそこにあるということを、絶えず確認することは重要なことである。そのような視座がキリスト告白の戦いと表明され、日本キリスト教会の 1953 年の信仰告白にそのことが告白されていることが再確認され、日本キリスト教会はヤスクニ問題を信仰告白の戦いとして取り組み始めた。

爾来 46 年、ヤスクニ問題は、「教会と国家、政教分離の問題、さらに歴史認識へとひろがり、何が問題の中心かとらえにくくなってきている」と言われる。今日、日本キリスト教会は靖国神社問題特別委員会を通して、正義と平和、沖縄のこと、原発の問題、人権、安保法制と歪なグローバル化の問題と、広範で重い諸課題に取り組みさせられている。それらはすべてキリスト告白、キリスト主権の視座のもとから取り組まれるべき課題で、十字架と復活の主イエス・キリストの体なる教会の信仰告白の事柄であり、聖霊の導きのもとにおける戦いであると、日本キリスト教会は受け止め、言い表し、不十分ながら具体的に取り組んで来たのである。

だが、「イエスは主なり」とのキリスト告白は、ただそれをスローガンのように掲げて声高に叫べばいいということではない。そうではなく、「父、子、聖霊への告白は、…イエスはキリストである、という信仰の展開である」(ハルナック・バルト「神の言葉 I/2」40 頁)と言われるように、キリスト告白には三位一体的展開が必要であり、それがふさわしいキリスト告白へと導くものでもある。

キリスト告白にとって重要な「神の主権」ということを一例にとってみると、W・デ・グルーチーの「キリスト教と民主主義」には次のように言われている。『主権』という概念は中世以来、宗教改革の神学においても重要であった。だが今日、神について主権という語を用いることは、家父長制的階層性や勝利主義に誤用され、それらを正当化すると論難されることもある。しかし神の主権は本来、勝利主義や神政的支配ではない。キリスト者が神の主権という表現で究極的権威について語るのは不適當だろうか。このジレンマを解決する方法は、神の主権の教理をキリスト告白の展開である三位一体の教理の中に位置づけることである。神の力は剥き出しの全能性の力ではなく、十字架に付けられたキリストの復活において、またこの世における聖霊の救済の働きにおいて明らかになる力である。このように理解されるならば、主権的な三一の神の教理は独裁主義的な体制に対する神学的批判の基礎となり、同時に、民主的な社会秩序に対して神学的な根拠を与えてくれる。神の主権は人間にとって束縛の源ではなく、自由の前提条件となる。主権的な三一の神は歴史を閉じるのではなく、聖霊を通して、正義と<シャローム>という歴史を開き、かつその目的が達成されるようにする。この観点に立つならば、神の主権とは、平等・自由・正義が人間の共同体を生み出す神の予定された決定と言える。それは抑圧された者たちの解放の教理であり、また解放された共同体の教理でもある。神の主権以外のさまざまな主権の主張は、…教会の主権や国家や人民の主権であれ…、そのような自由と共同体の実現を可能にするかどうかという観点から評価されなければならない」(意識的要約)。

(以下次号)

第 46 回靖国神社国営化阻止 北海道キリスト教連絡会議報告

加藤正勝（滝川教会牧師・北海道中会ヤスクニ・社会問題委員会委員）

北海道では9団体共同で毎年連絡会議を持っているが、2015年11月23日（月）、表題の集会を北海道クリスチャンセンターで開催した。説教者久野真一郎（札幌琴似教会牧師）による開会礼拝「復讐（報復）してはならない」、報告・計画検討、討議司会古賀清敬（宣教教師・北海道中会ヤスクニ社会問題委員会委員長）講演の後各地の活動報告と今後の運動計画について活発に意見交換し、閉会礼拝「地の塩・世の光」で終了した。

講演題「戦争法制と改憲にどう立ち向かうか」一和解の福音に促されて一
講師 稲 正樹 国際キリスト教大学客員教授（憲法学）日本基督教団所沢みくに教会会員。
参加者は48名であった。講師はクリスチャンとして、特に安保法制と改憲問題に和解の福音に基づいて行動することと、それは猶予なく緊急性を帯びていると話された。

2015年安倍政権は、民主主義を否定するような横暴な政治を行い、戦争法制＝安保法制を議事録のない不正な方法で成立させた。しかし終わりではない。我々に廃案、実行不能にする行動をとる必要性を訴えた。

現憲法は我が国のみならず、「われらは、全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免れ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する」とある。「平和に生きる権利」が70年近く前に制定された日本国憲法の中に明記されたことは、神の摂理によって与えられた大いなる希望のしるしだと考えている。私たちは全世界の国民が神の支配の下で、文字通り平和に生きる権利を保障されるようにと、それぞれの能力に応じて与えられたタラントに従って、平和のための戦い、建設、努力をしていかなければならないのではないかと。

もう一つ考えたいのは、「和解」の達成方法である。私たちは戦後、近隣アジア諸国民との和解と平和ではなく、反目と敵意にあった。植民地支配について議論もなく、過去の克服がキチンとなされてこなかったように思われる。歴史修正主義の跋扈（^{ばっこ}のさばり）に対しては真摯に過去を総括し、隣国からの建設的な批判的見解に耳を傾ける必要があるのではないかと。

日本の教会と私たちキリスト者も歴史と世界を支配する神を信じるものとして、キリストによる和解と平和を進めていきたい。

○安保法案は実行出来ないよう塩漬けにする運動、法律を通過させた議員の名を上げて落選させる運動を展開すべきである。国民の審判を下さなければならない。

○自民党の憲法改正法案は、安保法制に関連して、主権在民から天皇主権にし、国防軍を持ちいつでも戦争の出来る国とする目的が見える。人類（＝国民）の基本的な人権、自由、平和を求める現憲法を根底から破壊する。個人の権利を権威ある国家の力に従属させる方向なので、改憲の阻止には、さらなる政党レベル、阻止活動団体、一人一人が共闘する必要性があると訴えた。筆者は「私たちの国が軍事国、天皇主権、宗教弾圧などと戦時に逆行する政治を阻止することこそ教会の課題である」と、講演を通して強く考えさせられた。

<ヤスクニ・ニュース>

歴史の反省は「心からの誠意」による

韓日の外相は12月28日、韓国・ソウルで両国間の「慰安婦」問題の最終的な解決に合意したと発表した。日本政府は旧日本軍の「慰安婦」問題の「責任を痛感する」と称し、安倍晋三氏は「日本国首相」の名義で、韓国の「慰安婦」に「謝罪」と「反省」の意を示す。また、生存する「慰安婦」に援助を提供するため、韓国政府が関連の支援財団を設立して、日本政府がそこに10億円を提供するという。これは安倍政権が1993年の「河野談話」の精神を否定した後に、「慰安婦」問題で再び「河野談話」の軌道に戻ろうとしている。今回、日本政府は「河野談話」で触れた謝罪と反省の気持ちを述べたことは、韓日の間に横たわるこの歴史の難題が、共通認識の原点に再び戻ることを意味しており、また歴史問題の修正主義行為で国際道義と現実政治の「壁」にぶつかり、最終的に方向転換せざるを得なくなったことも意味している。

しかし、安倍政権の背後は特に米国側からの圧力によるもので、自発的な懺悔の振る舞いではない。日韓のメディアの報道によると、米国は「アジア太平洋リバランス」戦略と北東アジア情勢への考慮のために、日韓の政府が、安倍政権に歴史問題で妥協するよう繰り返し圧力をかけたという。今回の「慰安婦」問題は、この時から解決したと見るべきではない。「慰安婦」問題以外に、日本軍による強制労働、歴史記憶「遺産への登録申請」、靖国神社参拝などの問題が、今後も日本と隣国との間の歴史的な争いに火をつけるだろう。

歴史を銘記し反省することは、おもに「心からの誠意」による。「慰安婦」問題を含め、日本が隣国と歴史問題で向き合って進むことは、日本当局と社会が誠心誠意に歴史を直視し、歴史に対して責任を負う行為をとることであろう。
(新華網15年12月29日)

誰がお婆さんの尊厳を売り払うのか？ 光州市民の会声明文

「最終・不可逆的解決合意とは、被害者の名誉に対する極刑法的責任回避、強制徴用被害者問題の解決により大きな障害である」。…12月28日、韓日両国は、韓日外交長官会談を通じた日本軍慰安婦問題に対する合意案を発表し、朴槿恵大統領は韓日関係改善と大局的見地から、国民の理解を求めた。朴大統領は果してこのような合意案で、日本軍慰安婦被害者の名誉が回復され、傷が癒されたと思ったのか？ 日本軍慰安婦問題は、勤労挺身隊、強制徴用等、日帝による強制動員被害者問題と決して無関係ではない。したがって今回の解決方式は今後の全般的な強制動員問題解決においても、重要な先例を残すという点から重要な試験台だった。

日本軍慰安婦被害ハルモニたちが日本大使館の前で25年の間雨風に遭いながら、取り戻そうとした名誉回復と全く関係のない屈辱的な結果であり、他の強制動員被害者の問題解決さえ難しくする、悪い先例を残した。…以下省略…

(2015年12月29日「勤労挺身隊ハルモニと共にする市民の会」)

全国各地の神社が初詣客に改憲の署名

お正月の神社参りに、“憲法改正に賛同する署名活動”の動きが表面化している。東京のある神社の入り口に「誇りある日本をめざして」・「憲法は私たちのもの」の旗が目飛び込む。その付近のテントの「国民の手でつくろう美しい日本の憲法」・「1000万人賛同者を募集」のポスターが目につく。署名用紙に「東京都神社庁」とある。神社本庁は全国約8万社の神社を統括し、署名活動は全国規模で行っているようだ。神社本庁と日本会議による憲法改正運動の「1000万人賛同者ネットワーク」の一環であろう。憲法改正には国会発議と共に、国民投票で過半数(約3,000万票以上)の賛成が必要となるため、「美しい日本の憲法をつくる1,000万人賛同者」を全国に呼びかけている。

(リテラ2016年1月5日)

733号ヤスクニ通信 2016年2月14日
発行 日本キリスト教会
靖国神社問題特別委員会
発行人 栗田英昭 編集 川越弘
印刷発行 篠塚予奈(東京告白教会)
〒157-0061 東京都世田谷区北鳥山
1-51-12 TEL&FAX03-3300-6529